

JOURNAL OF JOURNEYS

青森紀行

佐藤りえ



出発～新青森

遅い夏休みを青森で過ごすべく、東北新幹線「はやて」に乗って大宮から新青森を目指します。

東北新幹線の新青森までの開通は2010年12月。盛岡以北へ新幹線で向かうのは、自分にとっては初めてのことでした。

3月11日の東北大震災を受け、鉄道も復旧を余儀なくされていますが、東北新幹線はこの旅行時（2011年9月）には運行状況がほぼ回復され、通常に近いダイヤに戻りつつある時期でした。

それでも途中停車した仙台駅では駅構内がまだ補修の途中であり、通過する景色のなかに、ブルーシートで覆われた屋根瓦や、撤去途中の瓦礫を集積した場所がいくつもありません。

新青森駅で新幹線を降り、レンタカーを借りて初日の宿泊先、奥入瀬を目指します。

新青森から奥入瀬方面へはバスの運行もありますが、途中で温泉に立ち寄る目的もあり、車移動を選びました。



十和田ゴールドラインを南下。お天気に恵まれ、車窓から折々八甲田山系の景色を臨むことができました。

八甲田山は標高1584m。どんどん道をのぼります。



うねうねとした山道を越え、酸ヶ湯温泉に到着。ここの標高は900メートルあります。

男女混浴の千人風呂を堪能。泉質は「酸性・含硫黄ナトリウム硫酸温泉」とのことですが、濃厚だな！と感じるものでした。湯温は少しあつめに感じたので長時間は入れなかったにもかかわらず、湯上がりがとてもぽかぽかしていました。



木造の建物はたいへん趣がありました。ロビーには近隣で生息している鳥獣類の剥製の展示などもあります。併設されたおみやげ処でりんご醤油と温泉タオルを購入（入湯料にタオルは含まれないため持ち込むか購入が必要）。

本館左手には別棟の宿泊棟があり、宿泊することもできる施設だ行ってから気づきました。泊まってあの湯に浸かったらえらいくにかくにやになれそうです。



酸ヶ湯温泉から山道を下り、初日の宿泊先「奥入瀬溪流ホテル」に到着。

チェックインして少々昼寝。酸ヶ湯の強烈なお湯にノックアウトされてしまいました。

小一時間後、空腹で起床。

夕食は宿のプランによるバイキング。天ぷら、ステーキなど調理コーナーもあり、メニューも豊富。地ビールなど傾けつつ美味しくいただきました。

施設にはバスの送迎で向かう外湯もあるのですが、今回そちらは利用しませんでした。食後は館内の露天風呂でまたひと風呂あびて就寝。



二日目は朝食後、ホテル周辺を散策。

ロビー奥から溪流沿いの散策路へ通じる道を歩きました。

ホテルではオプションで申し込むと、溪流沿いの席で朝食を採る、というサービスがあるそうです。

優雅な朝食風景の横を通り、遊歩道へ向かいます。



奥入瀬湧水館、奥入瀬溪流館と通過（早朝のためまだ営業してなかった）してかえで橋を渡り、出会い橋まで向かう。ここまではホテルから往復小一時間ほどで散策というか「散歩」ほどの歩きです。

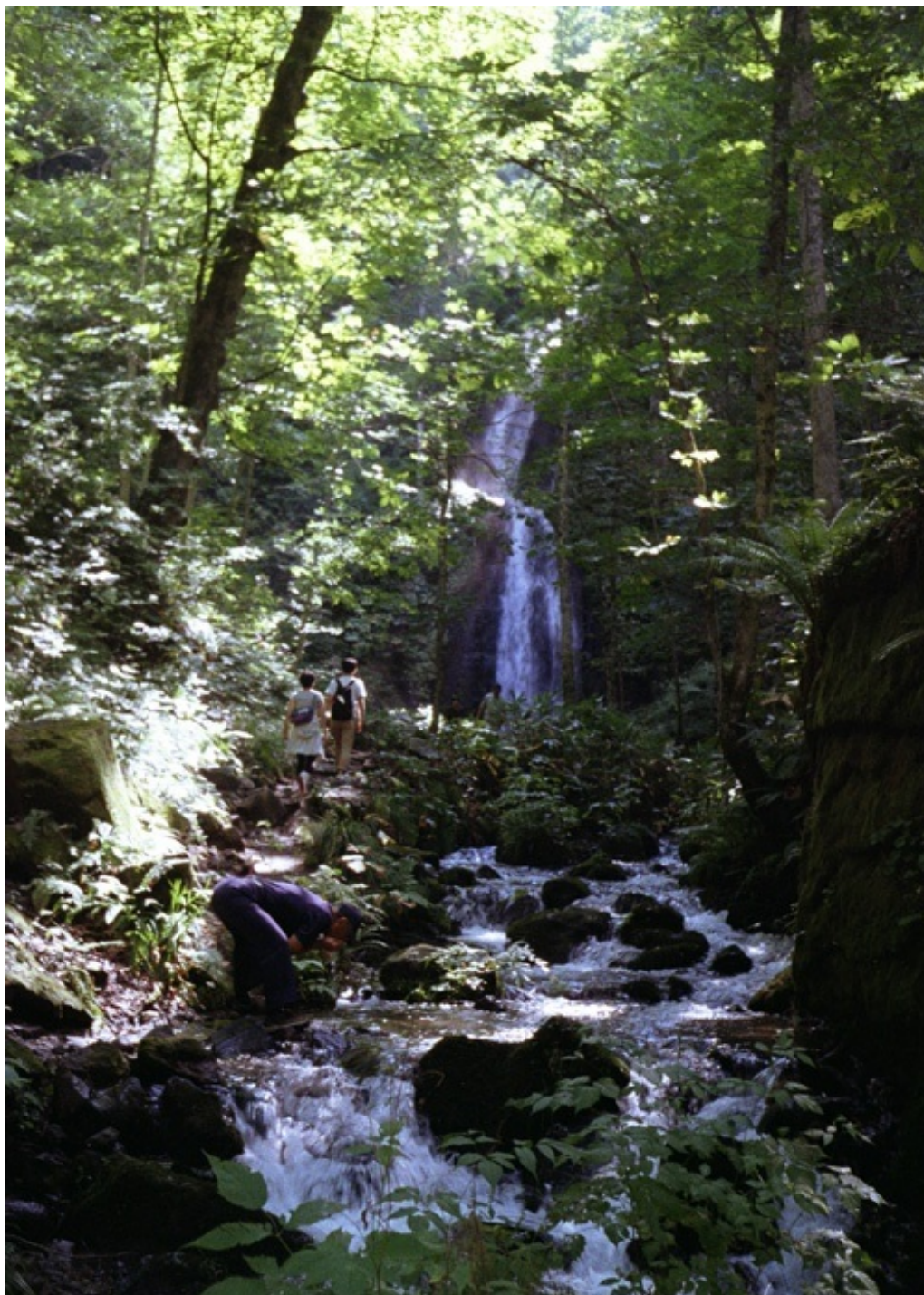
ホテルに戻りロビーで従業員の方に話を伺うと、散策目的のひとはもうとっくの昔に出かけられたとのこと（この時点で9:00ごろ）。



たいへん居心地のいいホテルで名残惜しいのですがそろそろ出発です。

写真はロビー奥のラウンジ「森の神話」中央にそびえる岡本太郎作の大暖炉「森の神話」。宿泊していなくても休憩や軽食の利用ができるとのこと。

ラウンジは部屋の二面が全面窓になっていて、快晴の朝、部屋全体が明るい光に包まれています。



奥入瀬溪流を車で南下。

ほんらい溪流は徒歩で巡ってこそそのものですが、今回は時間の関係により車移動となってしまった。

それでも途中、何度か車を止めて散策路に踏み込んだり、滝をながめたりしました。





雲井の滝にて。

この時期（9月後半）は避暑を過ぎて紅葉にはまだ早い、人出のあまり多くないとされる時期でしたが、それでも散策される方にたくさん出会いました。

散策は徒歩だけでなく、自転車で巡って終点で返却、バスや送迎車で戻るサービスなどもあるようです。





溪流を抜けて十和田湖へ向かいます。途中、御倉半島にある展望台「瞰湖台」からの眺め。十和田湖は周囲長が約46kmということで、展望台に上っても全貌を見渡すことはできません。とにかく大きい。



十和田湖に到着。遊覧船に乗る。私が利用したのはBコース（周遊）で、他にAコース（子ノ口-休屋）がありました。

オフシーズンのせいなのか、なんと乗客は我々のみ！

...申し訳なく思いつつ、ならばせいいっぱい満喫しよう！と意気込んで出発です。



十和田湖は日本で三番目に深いカルデラ湖で、最大水深は327m。船内では運行中ガイダンス放送が流れ、湖の起源や周辺の地理、歴史などを教えてくれるのですが、水深がもっとも深いあたりにさしかかるとそれを教えてくれたりもします。

湖の周囲はブナやカツラの自然林がひろがり、その姿が湖面に映し出されています。紅葉の時はさだめし幽玄であろうと思われました。ちなみに十和田湖周辺の紅葉は樹木の種類により、真っ赤というよりは橙がかった色合いをしているそうです。

船内放送では湖に程近い秘湯・蔦温泉を愛し、終の住処とした（本籍までうつしちゃったとか）作家・大町桂月の生涯についても語られていました。

船を降りた後は湖畔の「乙女の像」を眺め、近在のお店でヒメマス定食をいただきました。



そして国道102号線を西へ向かい、虹の湖、黒石温泉郷を通過、弘前へ向かいます。
ここでレンタカーを返却、徒歩で市内の歴史的建造物を巡ります。
まずは長時間移動の疲れを癒すべく、喫茶「可否屋葡萄満」へ。
ネルドリップのコーヒーでひといき入れた後、東門から弘前公園へ足を踏み入れます。
写真は東内門方面から臨む弘前城本丸。



弘前には明治、大正時代に建造された西洋様式を取り入れた建造物が数多く残っています。日没までのあいだ、カメラを抱えての建築巡りです。写真は東北最古のプロテスタント教会、日本キリスト教団弘前教会です。



こちらはカトリック弘前教会。住宅街の一隅にこつ然と姿をあらわす尖塔は感動的でした。



こちらは旧弘前市立図書館。

建物の左右にある八角形構造が特徴的です。

左手が階段に、右手が閲覧室などとなっています。他に館長室、図書室なども再現されていて、見学することができます。



図書館内部、通路にて。

内装は白とうすいグリーンを基調としたあっさりとした印象です。

建物全体に窓が多く、その繰り返し構造にもみせられました。



旧図書館の後ろには旧東欧義塾外人教師館があります。これは建物後ろからの眺めです。こちらは外国人宣教師用の住居として1890年に建てられ、その後再建されたものです。現在は1階でカフェが営まれ、2階が建築当時の様子を再現した展示スペースとなっています。

。



建物内部2階は、当時の生活の様子を再現した調度、説明が丁寧に展示されていました。写真はサンルームに設えられたブランコと、子供用のロッキングチェア。



外人宣教師館の裏手にはミニチュア建造物群がありました。

さきに紹介した明治、大正時代に建てられた建造物のほかに、もう現存していない商家などの歴史的建造物が十分の一サイズで再現されています。

写真後ろにはプロテスタント教会が。手前の建物は、明治期の薬屋さん。縦型の看板はすべて薬の広告なのです。



こちらは「角み」という呉服屋さんの建物。手前に白無垢の花嫁行列が。
暗くなると建物内部の照明が灯り、ライトアップされるそうです。
全部で14の建造物模型がありますが、どれもとてもよくできていて見飽きませんでした。



こちらはミニチュアではなく本物の青森銀行記念館。
内部も見学できますが、私が到着した夕刻には閉まっていた...



建物めぐりの最後はこちら、弘前市内で最も古いビル、「三上ビル」です。
今でもバリバリ現役で、喫茶店、飲食店、雑貨店などが営業しています。
(帰ってから調べてみたら昭和二年建築とのこと。平成15年に国の有形文化財に登録されています)



そんな三上ビル3階にあるセレクトショップ「STABLES」さんにお邪魔しました。

北海道、東北の素敵な手仕事の賜物、陶磁器やテーブルウェア、アクセサリ、ステーションナリーなど多彩な商品が、三上ビル独特の室内に溶け込み、ずーっと留まっていたいような雰囲気のお店でした。



弘前市内のみどころ、歴史的建造物はまだまだたくさんあったのですが、今回はここで時間切れとなりました。

市内のイタリアンで食事、駅近くのホテルへ歩いて帰りました。商店街の途中にはかわいいディスプレイのお店、商店会の取り組みとおぼしきお揃いの木の（！）看板、あいだに古くから営業されてるとおぼしき洋裁のお店があったり、興味をひかれるもの多数、のたのしい帰り道でした。



三日目、最終日。弘前から奥羽本線に乗って青森を目指します。
写真は弘前駅前にあった郵便ポスト。立派な林檎が乗っています。



青森駅に到着。反対側のホームに青い森鉄道の車両が入っていました。

車両の側面と前後にイメージキャラクター「モーリー」が。車体のカラーも同じ色で、かわいらしい。



青森駅から徒歩5分ほどの「青函連絡船メモリアルシップ 八甲田丸」に向かいます。写真は運行当時、鉄道車両を引き込むのに使用された、栈橋の車輛搬入橋からの眺め。



八甲田丸内部はたいへん見応えのある展示、見学内容でした。

フィルムの関係でモノクロ撮影になってしまったのですが、船体のカラーは白とイエローのツートン、とても綺麗な船です。



船内をコースに沿って見学すると、ブリッジ最上段の煙突展望台（めちゃめちゃ高くて怖い
です）から、船の心臓部、第二甲板（ディーゼルエンジンの搭載箇所）までくまなく見ることが
できます。

3Fにあたる遊歩甲板には、開業当時の調度品展示、戦渦や台風災害に見舞われた記録、運行
当時の映像などが。

写真は車両甲板に保存されている鉄道車両「キハ80系」の客席部分を、連結部から撮ったもの
です。



八甲田丸見学の後は駅方面へ戻り、「A-FACTORY」へ。こちらは特産の林檎でシードルを生産する工場をメインに、イトインや地場製品の販売コーナーが併設された施設です。

近年、国内旅行の際はその土地土地の味噌、醤油を購入するのを楽しみとしているのですが、こちらでも津軽みそを買いました（醤油は初日に酸ヶ湯で「りんご醤油」をゲット済み）。

おすすめのシードルもドライ、スイートともにゲット。訪問時はちょうどお休みでしたが、実際にシードルをつくる工程を硝子越しに見学できるスペースもあります。

ここ青森駅はほとんど目と鼻の先（ちなみにこの施設のはす向かいに「ねぶたの家 ワ・ラッセ」があります）。いよいよ帰路、新青森へ向かいます。



青森駅から特急で5分、新青森駅へ。

新幹線の時間まで一階の「あおもり旬味館」をぶらぶらします。

「北彩館」というおみやげ屋さんでは日本酒のカップ試飲機（紙コップを購入して5種類の地酒を飲み比べできるという夢のような仕組み）がありました。もちろんすべて飲み比べ、お気に入りの1本を購入。

通路には写真に入っている（右側の中ほど）金魚ねぶたを模した飾りがひらひら踊っていました。

物販コーナーの奥にある「地産地消飲食ゾーン」の「めえ」で昼食。

わたしは「十三湖しじみラーメン」を、ツレは「バラチャーシュー麺」を食べました。

しじみラーメンはじわじわくる塩味でももちろんおいしかったのですが、チャーシュー麺のきつ

ちり魚ダシがきいた醤油味にすっかりはまってしまいました。

他にも筍と小ネギがびっしり載った「太宰ラーメン」など興味がつきない品揃えでした。



新青森から新幹線に乗車。写真は花巻～北上あたりの、新幹線からの眺め。

二泊三日のみじかい旅が終わりました。

今回青森をまわるにあたって、東に行くか西（白神山地、五能線、十三湖など）に行くかですいぶん迷いました。どちらも、行ってみたいところだったので。

しかし、とにかく、すべてをまわりきるのは時間的に難しい。そういうわけで、今回組んだような旅程とあいなりました。

それでも時間が足りない、もっともっと見たい、長く滞在したいと思える場所が沢山ありました。青森は広いなーと改めて実感しました。

いつかまた、ふたたび、訪ねて行きたいです。

TRIP DATA

本文中の情報は2011年9月現在のものです。最新の状況と異なる場合がありますのでご注意ください。

*酸ヶ湯温泉

<http://www.sukayu.jp/>

*奥入瀬溪流ホテル

<http://www.oirase-keiryuu.jp/>

*十和田湖遊覧船

<http://www.lakeship-towada.co.jp/>

*可否屋葡瑠満

<http://homepage3.nifty.com/cafe-buruman/>

*STABLES

<http://www.thestables.jp/>

*弘前市 洋風建築（弘前市の観光情報ページ）

<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/kanko/youfuu/index.html>

*青函連絡船メモリアルシップ 八甲田丸

<http://www7.ocn.ne.jp/~hakkouda/hakoindex.html>

*A-FACTORY

<http://www.jre-abc.com/a-factory/>

JOURNAL OF JOURNEYS -青森紀行-

<http://p.booklog.jp/book/45351>

著者：佐藤りえ

<http://p.booklog.jp/users/poppendo/profile>

<http://homepage3.nifty.com/poppen-do/>

使用機材

iPhone4

(2-3、14、21、27~29、35-36page)

YASHICA-D

(6、8、12、17~20、24、31、33-34page)

OLIMPUS PEN EE-3

(4-5、7、9~11、13、15-16、22-23、25-26、30、32page)

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45351>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45351>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.